

〈マエストロが贈る珠玉のフレンチ〉

Cherished French Masterpieces with Maestro Chung

指揮とお話 チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, Conductor & speaker

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

▶プロフィールは8ページを参照

▶P. 15 for the Artist Profile

ビゼー：歌劇『カルメン』組曲より (約15分)

▶楽章解説は33ページを参照

Bizet: Excerpts from opera "Carmen" (ca. 15 min)

前奏曲	Prelude
アルカラの竜騎兵	Les Dragons d'Alcala
間奏曲	Intermezzo
アラゴネーズ	Aragonaise
ジプシーの踊り	Gypsy Dance

— 休憩 Intermission (約15分) —

ベルリオーズ：幻想交響曲 op.14 (約49分)

▶楽章解説は11ページを参照

Berlioz: Symphonie fantastique, op.14 (ca. 49 min)

- I. 夢・情熱：ラルゴーアレグロ・アジタート・エ・アパッショナート・アッサイ
Reveries: Largo - Passions: Allegro agitato e appassionato assai
- II. 舞踏会：アレグロ・ノン・トロッポ A Ball (Waltz): Allegro non troppo
- III. 野の情景：アダージョ Scene in the Country: Adagio
- IV. 断頭台への行進：アレグレット・ノン・トロッポ March to the Scaffold: Allegretto non troppo
- V. サバットの夜の夢：ラルゲット・アレグロ Dream of a Witches' Sabbath: Larghetto - Allegro

第8回

平日の
午後の
コンサート

1/29(月) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

Mon. January 29, 2018, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト：ハラダ チエ



文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

1/29

本公演のポイント

解説=柴田克彦

1 世界的名匠チョン・ミョンフンが当シリーズ初登場

2 フランスのポストを歴任したマエストロがおくる、
同国の情熱的な名作2つ

3 『カルメン』は、スペイン情緒と旋律美に溢れた、
ビゼーの代表作

4 『幻想交響曲』は、斬新な楽器法と標題性で
ロマン派の方向性を左右した、歴史的な一作

PLUS
1

皆が欲したローマ大賞



ベルリオーズとビゼーに共通する経歴は「ローマ大賞」の受賞です。これは、1803年に始まったフランスの芸術賞で、絵画、彫刻、建築、音楽の各部門から1作が選ばれ、受賞者は奨学金を得てローマに留学できます。音楽部門はパリ音楽院作曲科の学生のみが対象ゆえに公的とは言えないのですが、皆この賞をかなり欲した模様。ベルリオーズは1830年、ビゼーは1857年、共に数回目の挑戦で受賞しています。このほか、グノー、マスネ、ドビュッシーなども受賞する中、話題を集めたのがラヴェルです。彼は5回応募して3位にあたる賞が最高成績。最後の1905年はなんと予備審査で落選しました。すでに名作を複数発表していた有力者だけに、これが大問題となり、パリ音楽院院長デュボワの辞職と、ラヴェルの師フォーレの後任就任に至る「ラヴェル事件」に発展しました。ちなみに、ラヴェルが応募した年の1位は、フローラン・シュミット、カブレ、Kunc、Laparra、Gallois。特に後ろの3人は誰?といった感じです。最終的に賞よりも実力がモノを言うのは当たり前と言え当たり前……。

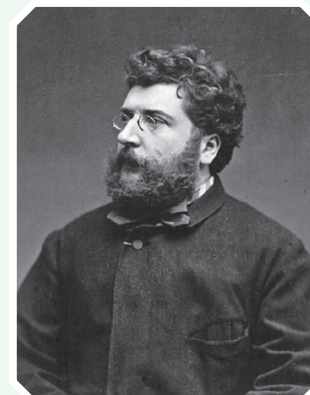
本日の作曲家

ジョルジュ・ビゼー

Georges Bizet
(1838—1875)

早世したフランスの天才作曲家。音楽家の両親のもとパリに生まれ、恵まれた環境で才能を発揮した彼は、9歳でパリ音楽院に入学。1855年=17歳の年に、今でも演奏される「交響曲 ハ長調」を作曲しました。1856年にはオフエンバックが主催したオペレッタ・コンクールで入選を果たし、翌1857年ローマ大賞を受賞。1860年イタリア留学から帰国後は、歌劇『真珠採り』(1863)、同『美しきパースの娘』(1866)を作曲しますが、大成功を収めることはできませんでした。しかし1869年に恩師アレヴィの娘と結婚後は、さらに意欲的な創作活動を展開。1872年には劇音楽『アルルの女』を作曲し、劇自体は不評ながら音楽は評判を呼びます。そして1875年に歌劇『カルメン』を発表。初演は不成功ではなかったものの、内容が過激だとして評価されず、ビゼーはその3ヶ月後に急死しました。死因はリウマチの発作や心臓発作などはっきりしていません。したがって彼は、大人気作となった『カルメン』の真の成功を知ることができませんでした。

ビゼーは、色彩的な管弦楽法やドラマ的な手法に長けていますが、何より稀代のメロディメーカー。『カルメン』『アルルの女』はもちろんのこと、歌劇『真珠採り』のアリアはポピュラー音楽にもなり、『美しいパースの娘』やピアノ連弾曲『子供の遊び』なども旋律美に溢れています。それにしても、『カルメン』後を思うにつけ、37歳を前に亡くなったのが心底惜しまれます。



傑作『カルメン』を世に送り出すも、36歳の若さで世を去ったビゼー

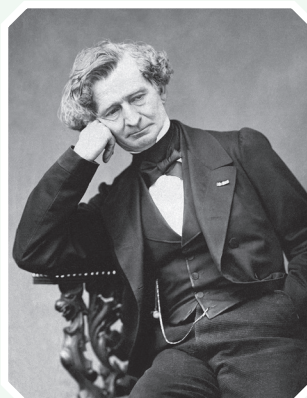
1/29

エクトル・ベルリオーズ

Louis Hector Berlioz
(1803—1869)

フランスのロマン派音楽を確立した革命的作曲家。リヨン郊外のラ・コート＝サンタンドレで、医者の子として生まれた彼は、町にピアノがなかったため、フルートとギターを習得しました。1921年パリに出て医科大学に入るものの、音楽家になることを決意し、父の反対を押してパリ音楽院に入学。1830年にローマ大賞を受賞し、『幻想交響曲』も初演します。1833年には同曲創作の動機を成した英国劇団の女優ハリエット・スミソンと結婚し、交響曲『イタリアのハロルド』(1834)、劇的交響曲『ロメオとジュリエット』(1839)などを発表するほか、指揮や評論の分野でも活躍。1840年代からは国外で高く評価され、欧州各国やロシアに赴いて大歓迎を受けました。さらには劇的物語『ファウストの劫罰』(1846)などを作曲。名著『管弦楽法』(1844)を執筆し、パリ音楽院の図書館司書も務めました。1850年代には、大作歌劇『トロイ人』を完成しますが、生前に全曲上演はなされず、別居中の妻ハリエット、後妻マリーヤ一人息子に先立たれて、孤独な晩年を過ごしました。

彼は、『幻想交響曲』にまつわるエピソードなどから、情熱的かつエキセントリックで自己顕示欲旺盛なイメージがありますが、それはPR用の顔で、実際は好人物だったともいわれています。そして、斬新なオーケストレーションや自由な構成で時代を先取りし、標題音楽の開拓者として、リストやワーグナーなど多くの作曲家に影響を与えました。



ベルリオーズの斬新かつ自由な作風は後世の多くの作曲家に影響を与えました
©Bibliothèque nationale de France

楽曲解説

ビゼー(1838-1875)

歌劇『カルメン』組曲より

ビゼーの歌劇『カルメン』(全4幕)から抜粋された管弦楽用の組曲。史上屈指の人気を誇る同オペラは、1872年から1874年にかけて作曲され、1875年3月、依頼主であるパリのオペラ・コミック劇場で初演されました。フランスの作家メリメの小説に基づく物語は、スペインのセビリアが舞台。純真な兵士ドン・ホセは、許嫁ミカエラがいながら、奔放なジプシー女カルメンと恋に落ちます。しかしカルメンは闘牛士エスカミーリョに心変わり。諦めきれないホセはカルメンを殺してしまいます。初演当時のパリでは拒否反応もあった血なまぐさい話ですが、スペインの香りと名旋律満載の情熱的な音楽は、やがて絶大な支持を獲得。管弦楽でも様々な組み合わせで演奏されています。

本来、『カルメン』第1、第2組曲と呼ばれるのは、20世紀初頭のオーストリアの音楽学者フリッツ・ホフマンが曲順を変えて編曲・構成した組曲ですが、各幕の前奏曲(2幕以降は「間奏曲」と題されています)を順に並べた変化形も、第1組曲として親しまれています。今回はその4曲に、第2組曲の最終曲「ジプシーの踊り」を加えた形で演奏されます。

前奏曲(第1幕への前奏曲):華やかな行進曲に「闘牛士の歌」が挟まれる前半部分と、悲劇を暗示した重くシリアスな後半部分で構成。前半のみ(または後半のみ)演奏される場合もあります。

アルカラの竜騎兵(第2幕への間奏曲):ファゴットが主旋律を奏でる素朴な1曲。アルカラはホセの駐屯地です。

間奏曲(第3幕への間奏曲):ハーブの分散和音に乗ってフルートが歌う、牧歌的で美しい音楽。この曲は『アルルの女』から転用されました。

アラゴネーズ(第4幕への間奏曲):活気に充ちたスペインの民俗舞曲。打楽器が活躍し、哀愁を帯びた木管楽器の旋律が変化を加えます。

ジプシーの踊り:第2幕冒頭の酒場での熱狂的な音楽。カルメンと仲間たちが歌い踊り、次第に激しさを増していきます。

***ベルリオーズ『幻想交響曲』解説は11ページをご覧ください。**

しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。近著に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。